

# 日本の山村における 地カブの栽培方法について —静岡県井川地域の事例—

川上 香

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

## 要 旨

「地カブ」などと呼ばれる自生するカブやカブの仲間については、宮崎県椎葉村の焼畑と関連した事例などの報告がある。しかしこれらは、自生状況の報告などにとどまり具体的な栽培方法は明らかにされていない。そこで本研究では、静岡県井川地域にあるX集落を対象として昭和30（1955）年頃からの山村における地カブ栽培がどのように継承されてきたのかを示し、そこから現地の人にとって地カブの作物としての位置づけと生活文化との関わりを明らかにする。結果は以下のような3点にまとめられる。

1つ目は、昭和30（1955）年頃の茶畑および焼畑での地カブ栽培である。X集落における地カブ栽培は、主な栽培地が茶畑と焼畑であった。茶畑では、地カブはチャの株間に自生しており、同じくチャの株間で栽培されていたコンニャクを収穫すると地カブは勝手に生えてきたという。地カブの菜花は養蜂の蜜源に利用した。茶畑の地カブの種子を採集し、焼畑でヒエと地カブを混播した。

2つ目は、昭和60（1985）年頃から現在までの常畑における地カブ栽培である。X集落出身のAさんに注目した。Aさんは茶畑だけではなく常畑でもコンニャク栽培を行うようになった。常畑に勝手に生えてきた地カブに花を咲かせ、種子が自然に落ちるよう畑に放置し、X集落の茶畑の地カブ栽培のように、コンニャクを収穫すると地カブが自然と生えてくるような栽培環境を作り出していた。

最後は、昭和30（1955）年頃から現在までこぼれ種子を用いる理由についてである。昭和30年代から現在まで地カブの栽培にこぼれ種子を利用することが一貫していた。背景には、地カブは自生力が強いという認識と、自家採種した種子を、いろいろな畑にふりまき、生えてきたものを利用するというAさんの祖母が行っていた栽培方法の影響が考えられた。

X集落では、重要な商品作物であったチャやコンニャクを栽培するための茶畑において、コンニャクの収穫が終わると勝手に生える地カブは秋から春先に得られる自給食料として重要ではあるが、あくまで副次的作物として位置づけられて継承されてきた。しかし、焼畑での栽培や養蜂における春先の蜜源としての利用など、山村の生業や生活文化と密接な関わりを持つ作物であったことが明らかとなった。

キーワード：カブ、焼畑、茶畑、自給的農耕、山村

---

# Cultivation of Local Turnips in Mountain Villages in Japan:

## A Case Study in the Ikawa Area, Shizuoka Prefecture

KAWAKAMI Kaori

Department of Regional Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

### Summary

Studies on *jikabu*, a native turnip species, have been conducted in several areas, including reports about Shiiba Village, Miyazaki Prefecture, where slash-and-burn agriculture had been practiced. However, these reports are fragmentary, and specific cultivation methods have not been clarified. This study aims to clarify the cultivation of native turnips in mountain villages and the transition of cultivation methods from around 1955 to the present. The study site is village X in the Ikawa area of Shizuoka Prefecture. The results are summarized in three points as follows.

The first point concerns the cultivation of native turnips around 1955, when slash-and-burn agriculture was still practiced. There were two types of cultivation sites in village X. One was tea fields, where turnips grew naturally between tea plants. Those turnips grew on their own after *konjak* potato, which was also grown between tea plants, was harvested. Turnip flowers were used as a nectar source for honey bees. The other type of site was slash-and-burn farming fields, where seeds of the turnips collected from the tea fields were planted along with Japanese millet.

The second point is the current cultivation method of native turnips in *jobata*, or permanent agricultural fields since around 1985. Mrs. A from village X began cultivating *konjak* in a permanent field in addition to a permanent tea field. She let the turnips grow on their own in the permanent field and left their seeds to fall naturally in the field, creating a cultivation environment where turnips would grow naturally after harvesting *konjak*, just like the turnips in tea fields in village X.

The last point refers to the reason for using spilled seeds in the cultivation process. From around 1950 to the present, use of spilled seeds for cultivation of turnips has been common, which may be attributable mainly to the recognition that turnips grow wild and that there was an influence from the cultivation method used since Mrs. A's grandmother's generation, in which self-seeded seeds were collected and sowed in various fields.

In village X, tea and *konjak* were important commodity crops. Turnips, which grow on their own in tea fields after *konjak* is harvested, have been passed down from generation to generation as a by-product, although they are recognized as an important product for consumption by local people from autumn to early spring. This study has also clarified that the locally-grown turnips were closely related to the source of livelihood and the life of the mountain village, including slash-and-burn agriculture and beekeeping.

**Key words:** turnips, slash-and-burn agriculture, tea field, farming for self-consumption, mountain villages

- |                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| 1. はじめに               | 3. 現在の地カブ栽培        |
| 1.1 先行研究と目的           | 3.1 X集落の地カブ栽培の現状   |
| 1.2 調査方法              | 3.2 Aさんについて        |
| 1.3 調査地の概要            | 3.3 Aさんの地カブ栽培      |
| 2. 昭和30（1955）年頃の地カブ栽培 | 3.4 地カブ栽培でAさんが行う作業 |
| 2.1 X集落の耕作地と生活の概要     | 4. まとめと考察          |
| 2.2 地カブの栽培            |                    |

## 1. はじめに

### 1.1 先行研究と目的

現在、日本の山村では人口減少や高齢化が進み、集落をどのように持続させるかに関心が寄せられている。山村住民は、近代化の波の中で山と人との関係を柔軟に変化させ生活を維持してきた（池谷 2019）。居住地から商店が遠く、車での移動が地形的に不自由な山村では、食料の宅配などに頼りながらも、小規模な畑の農耕も観察できる。山村では、現在どのような植物や作物を食利用し生活を維持しているのだろうか。2つの報告を紹介する。

1つ目は、松島らが行った南アルプス周辺山村である長野県の大鹿村の報告である（松島ら 2013）。大鹿村では78種類もの食用野生植物が確認されている。葉や茎、蔓や若芽、果実や堅果、花や蕾、地下茎を利用している。また一般的には、栽培植物のカラシナが毎年こぼれ種子から庭先に自生している例も報告されている。しかし、高齢化や食生活の変化、更にはシカの食害で、その利用は減少傾向にあるという。

2つ目は、広田勲らが行った、岐阜県の中山間地での自給的農業生産と植物採集や消費の実態の実証的調査である（広田ら 2020）。当地域では、野生、半野生の植物の利用と、ホームセンター等で入手した多種類の作物の栽培が行われており、家庭に必要な分を少量ずつ長期に収穫し利用している実態が明らかにされている。また「ヤツガシラ」と呼ばれるセイヨウアブラナ、「アキマ

メ」というマメ科の作物、「アカウリ」というウリ科キュウリ属の作物3種類が地域内で自家採種されていたという。広田らは、中山間地域の自給的農業生産は小規模で、作物の残存や継承の背景が統計情報にも反映されにくく、実態が把握できないという問題点を上げている。

2つの報告から、山村では、現在でも食用野生植物や地域内で継承された作物が利用されている状況が明らかにされた。しかし、その利用は減少傾向にあり、個人の小規模な農耕の範囲で継承されている。継承されている背景や、栽培の現状を明らかにするためには、地域において聞き取り調査や農耕の参与観察を行う必要がある。

筆者は、自然条件が厳しく、農業の条件にも恵まれているとは言い難い日本の山村において、一部の在来作物については、入手しやすい近代作物に代替されずに栽培が続いているのはなぜかという点に関心を寄せている。在来作物の定義には統一されたものはないが（香坂・富吉 2015）、ある地域で栽培者自身が自家採種などによって種苗の保存を続けながら栽培し、世代を超えて生活に利用してきた作物である（山形在来作物研究会 2007）。

筆者は、静岡県井川地域において、2019年8月と10月に在来作物栽培について聞き取り調査や畑の観察などの予備調査を行ったところ、X集落で「地カブ」と呼ばれている作物が継承されていることがわかった。

井川地域には、「井川の地カブ」、「かきんのカ

ブ」という在来作物があり「井川の地カブ」はカラシナの一種で、「かきんのカブ」は在来カブであると報告されている。「井川の地カブ」はわかっているだけで3種類が確認されており、生育が良いと根がカブのように太るものであるという（稲垣 2014）。地カブの根部はカブのように食べられていた（静岡市葵区役所地域総務課 2013）。

X集落で「地カブ」と呼ばれる作物は、興味深いことに、焼畑では播種し、集落の茶畑では自生する作物であった。

カブは地域ごとに多様な種類が栽培され（青葉 1981）、カブの仲間は国内で自生していることが報告されている（縄田・山本 2009）。日本の山村における焼畑とカブについては、井川地域においてカーシと呼ばれる焼畑の2年目にヒエとカブを混作していたとの報告がある（大村 1997）。またどこにでも生える意の「フツテカブ」とも呼ばれる宮崎県椎葉村の平家カブの事例（斉藤・椎葉 1995）や、熊本県五木村において焼畑に作物を作ると勝手に生えてきたというヤマカブの事例が報告されている（寺嶋 2021）。九州のカブナを調査した江頭宏昌は、焼畑が行われていた九州山地各地に「かぶ」とか「こな」と呼ばれるカブナ<sup>1)</sup>が自生<sup>2)</sup>していることを紹介し、九州各地のカブナが焼畑と無縁とは思われないとして、焼畑で栽培されていた可能性について示唆している（江頭 2021b）。

このように自生するカブの仲間については、事例が断片的に報告されているものの、具体的な栽培方法や継承の理由などについては明らかになっていない。

本稿の目的は、静岡県井川地域のX集落における地カブ栽培が過去半世紀以上にわたってどのように維持されてきたのかを明らかにすることを通して、日本の山村における自給的農耕を在来作物がどのように支えてきたのかを考察することである。

X集落の住民によると、地カブは「かきんのカブ」と同様のものであるという。同定は住民

に従い、本稿では地カブと表記する。

今回対象とした地カブは、自生する植物である。このように耕地に自生し、除草などの管理の一部が人為的に行われる状態は半栽培ととらえることもできる。本稿ではその議論には触れず、地カブを作物ととらえ、茶畑や常畑で自生している状態も栽培と表記した。

## 1.2 調査方法

調査は、2019年8月と10月、2020年10月と2021年3月から6月の間の80日間にわたって行った。調査方法はX集落の住民6名と、X集落から転出し井川地域に在住している3名（表1）を対象とした聞き取り調査と畑の観察、農作業の参与観察である。

## 1.3 調査地の概要

調査地は南アルプス周辺山村である静岡県静岡市葵区井川地域のX集落と転出先の井川地域内の個人の常畑である。

井川地域は静岡市の中心部から車で約2時間かかる距離にあり（一般道で約60km）、間ノ岳（3,189m）を水源とする大井川の最上流部に位置する（図1）。

南アルプス周辺は地形や地質が複雑な上、崩れやすい地質である（静岡市 2010）。多雨な地域であり、2010年代に入ってから冬期の最低気温マイナス11.3度（2012年2月3日）、夏期の最高気温35.1度（2013年7月13日）を記録している。

人口は2000年には874人、2008年には664人、2018年には481人と減少傾向にある。昭和32（1957）年には大井川に井川ダムが建設されている。集落は大井川（井川湖）の両岸に点在している。X集落はそのうちのひとつで、井川地域内でも上流部に位置する（図2）。ダム建設のため大井川沿いの常畑や家が水没した。X集落は他の集落に比べると日照時間が長く、井川地域の中では温暖な集落である。チャ、シイタケが主な商品作物で、ほとんどの住民が野菜類を自給



表1 調査対象者

番号	名前	年齢	性別	栽培の内容	住居
①	A	90代前半	女	自給用野菜類 チャ シイタケ	転出（井川地域内）
②	B	80代後半	男	自給用野菜類 チャ シイタケ	X集落
③	C	80代後半	男	自給用野菜類 チャ シイタケ	X集落
④	D	80代前半	女	自給用野菜類 チャ シイタケ	X集落
⑤	E	80代後半	女	自給用野菜類 チャ シイタケ	X集落
⑥	F	90代前半	女	自給用野菜類 チャ シイタケ	X集落
⑦	G	60代前半	男	自給用野菜類 チャ シイタケ	X集落
⑧	H	90代前半	女	自給用野菜類 チャ	転出（井川地域内）
⑨	I	80代前半	女	自給用野菜類 チャ シイタケ	転出（井川地域内）

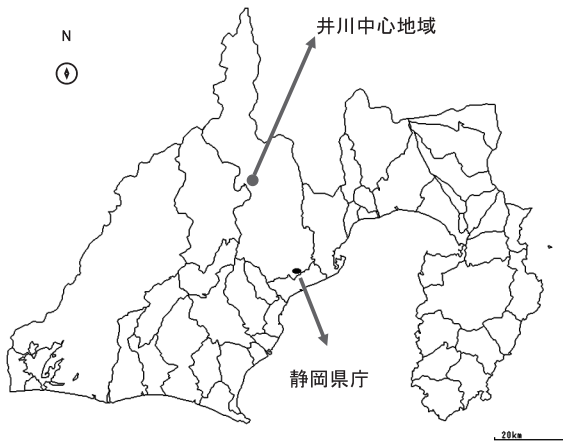


図1 井川地域の位置  
（フリー素材を用いて筆者加筆）

的に栽培し近隣や親族へも贈答している。また、静岡市内の直売所などへの小規模な出荷も行われている。

## 2. 昭和30（1955）年頃の地カブ栽培

昭和30（1955）年頃の地カブの焼畑と茶畑での栽培内容を明らかにするため、聞き取り調査をもとに当時の耕作地と生活の概要や地カブの栽培方法についてまとめる。

### 2.1 X集落の耕作地と生活の概要

昭和32（1957）年のダム竣工前のX集落の耕作地は、焼畑、山の常畑や茶畑、集落の茶畑、家周囲の常畑であった。焼畑や山の常畑は片道1

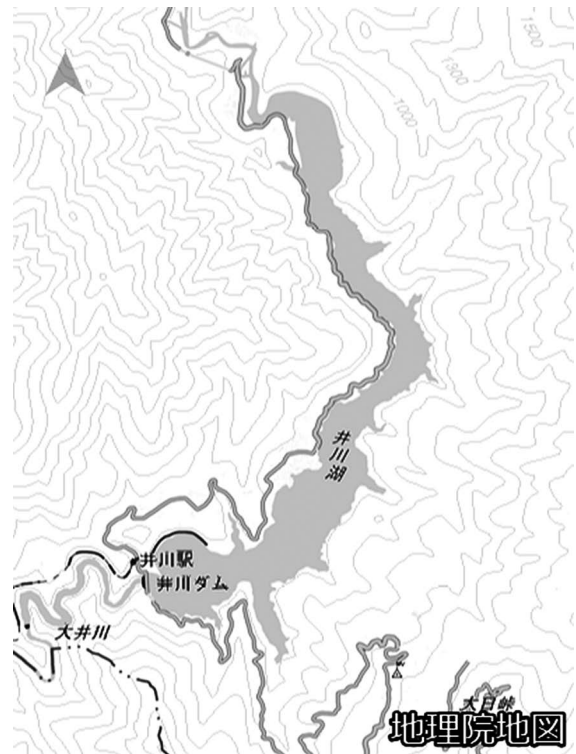


図2 井川中心地域（地理院地図のおよそ1/50000データを用いて方位筆者加筆）  
X集落は井川湖周辺にあり図の上部に位置する。

時間弱の徒歩圏内であったが、どの家庭も子どもの数が多く、往復に手間取ることから、4月下旬から10月下旬頃までは祖父母や母親、未就学児は山の小屋に泊まることが多かった。しかし、就学している子どもがいたり、集落にある常畑にも野菜類や穀類が作付けられていたりしたた

め、大人の往来は頻繁であった。11月初旬から3月下旬は、集落で過ごし、オオムギ栽培や冬野菜の栽培、山の常畑の整備などを行った。

## 2.2 地カブの栽培

聞き取り調査をもとにX集落の耕作地ごとの地カブの栽培内容を示した(図3)。地カブは焼畑では播種していた。山の常畑では畑の環境によって播種する場合と自生する場合があった。茶畑では自生していた。常畑では自生していたかどうかは不明であった。地カブと常畑の葉菜類の栽培時期の比較のため、図3の集落の常畑の欄には、Aさんの記憶をもとに葉菜類とダイコンの栽培時期を記入した。当時は葉菜類の種類は今ほど多くなく、ダイコンの根部分が太る前の葉部分をヌキナと呼び、夏用の葉菜として利用した。

### (1) 焼畑の地カブ栽培

次に焼畑と茶畑での地カブ栽培についての聞き取り調査の内容を報告する。

焼畑では焼畑を開いた1年目に地カブとヒエを混播した(A・C・Hさん)。焼畑を行う土地が遠く、地カブを集落への持ちかえるのが難しい場所では少量を播種した。集落と往来しやすく栽培や収穫が容易な焼畑に、より多く播いた(Aさん)。焼畑では4月下旬に5反ほど火入れを行い、ヒエをまず播いた後、焼け残った切り株に登って地カブを播種したという(Hさん)。ヒエ、地カブ、サントウハクサイの種子を予め混ぜておき播くこともあった(A・Iさん)。焼畑の1年目の土は焼いた木の根が腐らないため、とても固く、土の量も少ないためヒエと地カブが主な作物であったという(A・C・Hさん)。標高が高い焼畑では、地カブは冬越しできず陽当りのよ

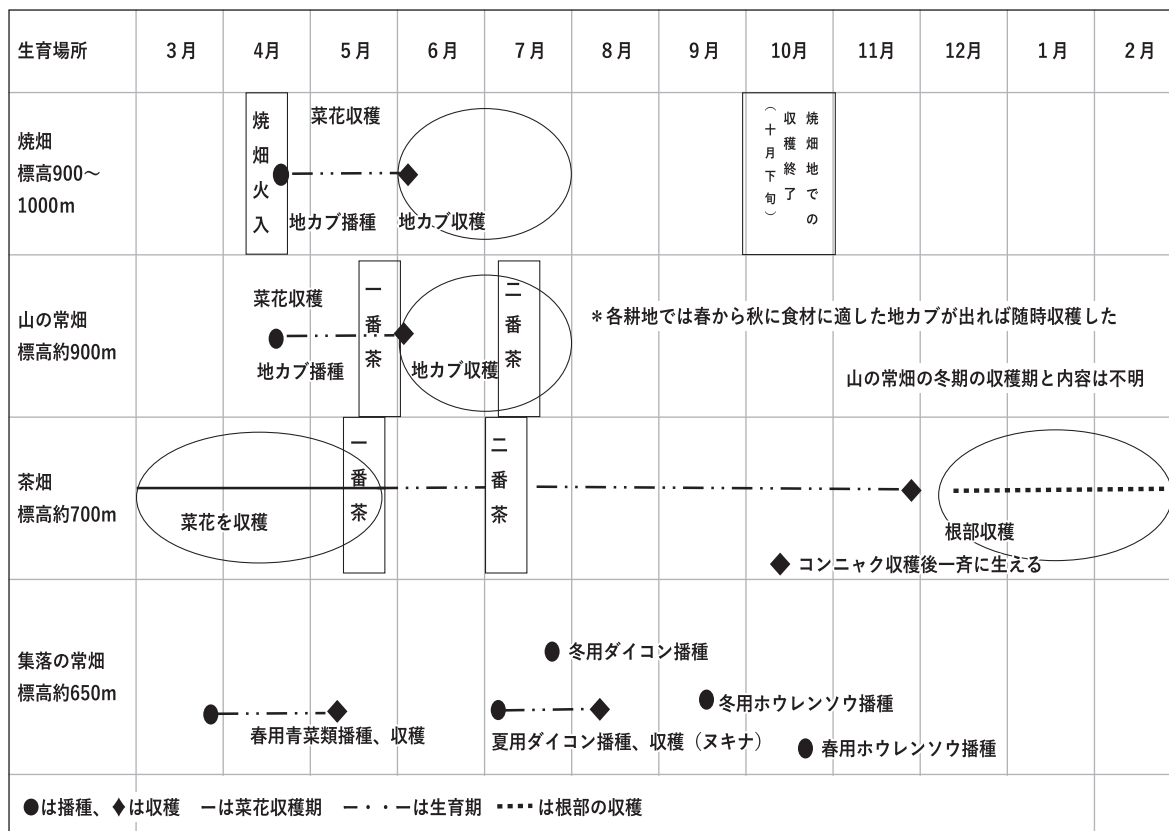


図3 昭和30(1955)年頃のX集落の耕作地と地カブ栽培(筆者作成)

楕円は地カブの主な利用期間を示す。標高はAさんの畑を基準に国土地理院地図等高線で判断した。焼畑は移動するため標高の詳細は不明である。時期についてはおよそであり前後することもある。

い場所に育った何株かが残っていた (Aさん)。一番茶の摘み取りが一段落すると、焼畑の除草に行き、生長した地カブを収穫した。焼畑の地カブは、集落の常畑の葉菜類の端境期にできるので「山の土産」と言って集落の人びとに分配すると大変喜ばれた (Iさん)。逆に地カブの生長が良すぎると「ヒエが負ける」と言って地カブを抜き取っていた。ヒエの生育が良い中で育った地カブは陽が届かず軟弱となり、柔らかくて美味しかったという (Aさん)。

## (2) 茶畑の地カブ栽培

X集落ではチャが商品作物の一つであった。沢沿いの斜面地などが茶園となっていた。昭和30年代までは、手摘みやハサミ刈りによる収穫作業を行っており、現在見られるような列植えのチャではなく、丸く仕立てられたチャの木が点在する茶園であった。このためチャの株間は広く、商品作物であるコンニャクやコウゾが慣習的に植えられていた (A・B・C・F・H・Iさん)。地カブは、陽当たりがよい茶園に出てくるもので、シソなどと一緒に生えており、7月初めの二番茶を摘む前に作業の邪魔になるものは除草された (Aさん)。焼畑にヒエと混播するための地カブの種子は、茶畑で採集しており (A・Hさん)、一合くらいとったことがあるという (Aさん)。10月にコンニャクを収穫すると地カブが自然と生え、3月は地カブの菜花が茶畑にたくさん見られ養蜂の春先の蜜源植物としても利用された (Aさん)。茶畑の地カブは、自分の茶畑で生長した地カブを主に食利用していた。春から秋にかけてはチャの木の下などで地カブが発芽することがあり、食材に適当な20cm前後のやわらかい葉茎を収穫することができた。根部は太るものと太らないものがあり、根部の肥大には時間を要した。肥大したものは冬期に茶畑で収穫できた。地カブは春先の野菜が少ない時期にも菜花が利用できる所以食料として大切にしよう父に言われていた (Aさん)。

以上から、X集落では地カブは根菜としてよりも、葉菜としての利用に重点がおかれていたようである。標高差を利用して、常畑の葉菜の端境期に、地カブの葉茎の収穫を行っていた。地カブを焼畑で播種する理由は、地カブが自生していないためであった。

## 3. 現在の地カブ栽培

X集落の住民と転出者が行っている現在の地カブ栽培について、聞き取り調査や畑の観察をもとに報告する。

### 3.1 X集落の地カブ栽培の現状

住民は茶畑で地カブの菜花、葉茎、根部の収穫を続けていたが、現在は地カブの自生は、ほとんど見られなくなった。シカやイノシシがたびたび見られるようになり、地カブの葉茎や肥大した根部が食害されるようになったためである。

住民は柵などの獣害対策を施した家周囲の常畑や集落内の畑で野菜類を栽培するようになり、地カブは常畑の中の野菜が作付けされない場所や周囲で、こぼれ種子から生長を繰り返している (写真1)。地カブが常畑にあるのはA・E・F・G・Hさんで、B・C・Dさんは無かった。Iさんは不明である。Gさんは畑に地カブがあったが利用しておらず、畑に地カブのあるEさんも、地カブはアクが強いと感じており、現在は菜花を少し食べる程度で他の野菜を主に利用している。他集落に転出したHさんは常畑の周囲に自生した地カブの菜花部分をわずかに利用している。

このように地カブの栽培は減少傾向にある。住民のほとんどは自給的農耕を行っているが、家族の減少や高齢化で消費量が少なくなっており、また地カブを贈答しても若い世代にはあまり喜ばれない。このことも地カブの利用が減少している理由と思われた。しかし、地カブの菜花の利用は3月頃に食べられる野菜類が少ないことや慣れ親しんだ味を求めて栽培が持続している。

### 3.2 Aさんについて

地カブ栽培が減少傾向にある中、Aさんは耕作中の耕地すべてで地カブ栽培を行っていた。Aさんは焼畑を経験しており、長年地カブ栽培を行っていた。Aさんに注目し参与観察を行った。

AさんはX集落で生まれ、焼畑と山の常畑、家周囲の常畑、茶畑の耕作を行ってきた。しかし昭和60年代に、井川地域内の他集落に転出し、現在はAさんが「背戸の畑」と呼ぶ家の裏側にある常畑を耕作している。X集落へは週3日程度、農作業のために通い、常畑2か所と斜面地の茶畑の管理と栽培、シイタケ栽培を行っている。Aさんは家族と暮らしており、農繁期は市街地に転出した親族から作業支援を得ている。野菜類は、ほぼ自給用で作業支援に来る親族に贈答することが多い。コンニャクは農協や個人に出荷し、チャとシイタケは自給用と販売用がある。

### 3.3 Aさんの地カブ栽培

Aさんは、X集落の2か所の常畑と、茶畑、小屋横のコンニャク栽培地、転出した別集落の背戸の常畑で地カブを栽培していた。

また、チャの株間にコンニャク栽培も行っていた。栽培地ごとの地カブ栽培の現状をまとめた。

#### (1) 道沿いの畑 (2021年3月)

この畑の地カブは、トマトのハウス横や、通路沿いに多く見られた。耕起された畑の中央に1株だけ地カブが残されていた(写真2)。今後作付けする作物の生長に影響が出そうな時に地カブを抜くかどうか判断するという。

#### (2) 上の畑 (2021年3月)

この畑では物置小屋の裏や畑周囲と畑内の通路沿いを中心に、地カブが見られた。チンゲンサイ、サントウハクサイなども見られたが、地カブのようにとう立ち<sup>3)</sup>しており、地カブとの区別が困難であった(写真3)。

#### (3) 茶畑 (2020年10月)

茶畑ではチャの株間にコンニャクと地カブが並んで生えていた。地カブの数は少なかった。11日後に再度茶畑を訪れたところ、地カブが獣害にあっていることが観察された(写真4)。

#### (4) 小屋の横のコンニャク栽培地

このコンニャク栽培地は「上の畑」に附随し、背後が山林となっている。2020年10月に筆者もコンニャク収穫を体験した。Aさんによると、その後、地カブの発芽が見られたが獣害に遭ったとのことである。2021年3月に観察したところ、植物はほぼ何も見られなかった(写真5)。

#### (5) 背戸の常畑 (X集落外)

背戸の常畑はX集落外で井川地域内にある。地カブは畑の中のコンニャク栽培地に集中していた。「上の畑」と同様に、近代品種の葉菜類もとう立ちしていたため、地カブとの区別が困難であった(写真6、7)。

### 3.4 地カブ栽培でAさんが行う作業

AさんのX集落の茶畑や小屋横のコンニャク栽培地では、獣害のため、地カブの栽培が難しくなっていた。背戸の常畑のコンニャク栽培地に最も地カブが集中していたことから、背戸の常畑の参与観察を行うこととした。以下はX集落外のAさんの背戸の常畑における地カブ栽培の報告である。

畑の概要と、地カブ栽培と生業活動のかかわりを述べ、栽培方法について報告する。

#### (1) 背戸の常畑の概要

背戸の常畑は、元は茶畑で、Aさんが家を建てる際に購入し、業者に委託して整地した。茶畑と道路に挟まれており、背後には道路をはさんで山林が広がっている。家に向かって右側の常畑の約3分の1はコンニャク栽培地で、その部分に地カブが多く見られた。隅には、資材小屋



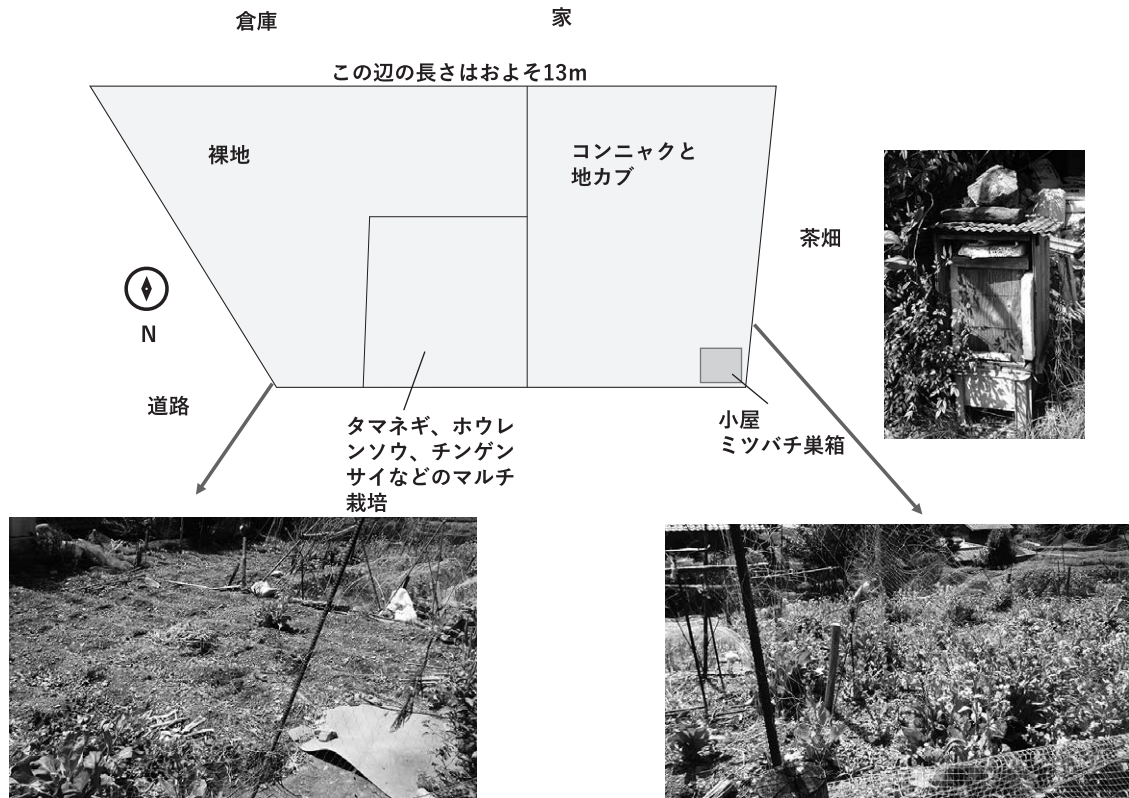


図4 Aさんの背戸の常畑（2021年3月筆者撮影・図作成）

と市街地で養蜂を行っている親族から預かったニホンミツバチの巣箱が設置されていた（2021年3月当時は空箱）。地カブは引っ越し当日とう立ちしていた個体をAさんが発見し、以降更新しているものだという。

左側約3分の2は裸地とタマネギなどの栽培地になっており、周囲には地カブや他の葉菜類のとう立ちが観察された。裸地は野菜類を植えるため、耕された後の状態であった。畑の周囲や中央には獣害対策の網が張られており、中央には自動音声による獣害除けが設置されていた（図4）。

## （2）生業活動と地カブ栽培のかかわり

### ①コンニャク栽培とのかかわり

コンニャクは収穫量を増やす目的で、X集落から移植したコンニャクをもとに栽培をしている。X集落で獣害がひどくなる以前から栽培を行ってきた。コンニャクは10月の収穫後、地中

にキゴと呼ぶタネイモを残して越冬させ、翌年に自然に生えてくるよう考えられた栽培が続けられている。コンニャクを傷つけないようにするため、この場所は深く耕さないが、10月の収穫時には密集しているコンニャクの植え替えも行われるため、栽培地の7割程度が掘り返される。Aさんはコンニャクを収穫すると地カブやその他の葉菜類が勝手に生えてくるといふ。

茶畑だけでなく常畑においてもコンニャクと地カブや葉菜類が生長を繰り返す環境が維持されていた。

### ②養蜂とのかかわり

Aさんの畑に設置されているニホンミツバチの巣箱は、市街地に住む養蜂を行っている親族が所有しているもので、例年は4月末に設置される。地カブや他の葉菜類の菜花はニホンミツバチ用の花粉や蜜源としても栽培される。Aさんの父親も以前はX集落で養蜂を行っており、茶畑の地カブを蜜源にしていたという。

### ③自給的な野菜栽培とのかかわり

Aさんの栽培している作物は購入した種子による近代品種が中心となっている。このうち2020年10月と2021年4月の葉菜類の栽培は「表2」のとおりである。

これらの葉菜類は常畑の中で畝を立て、その部分に播種して栽培が行われている。とう立ちした葉菜類の一部は種子ができるまで畑に残すものもある。このため3月は地カブと他の葉菜類の両方の花が見られた。

Aさんは冬に利用するハクサイを栽培している。ハクサイが戦後に入ってきてからは地カブの利用価値が下がったと感じたという。ハクサイは、地カブと同じように冬場に利用できる期間が長く、かつ食味が良いためである。しかしハクサイに代替されないのは、地カブの自生力の強さと、凍害や鳥害に遭いにくいこと、また、春先の野菜が生長していない時期に菜花が豊富に収穫でき、かつ養蜂の蜜源にもなること、春から秋にかけて食用に適したやわらかい葉が耕作地のどこかで少しずつ収穫できるという有用な点があるためである。

### (3) Aさんの作業

Aさんが地カブ栽培で行う主な作業は、①種子となる個体の選別②こぼれ種子の播種③自家採種④地カブの除草⑤施肥である。それぞれの内容を述べる。

#### ①種子となる個体の選別

Aさんは、地カブや葉菜類の中から種子としたい個体を残し、他は刈るか抜き取る（写真8）。2021年は4月27日にその作業が行われた。Aさんは抜き取り作業を筆者に依頼した。

Aさんから残すよう指示のあった地カブは、道路わきに毎年出てくる個体、ニホンミツバチの巣箱の周辺の個体（10本程度）、コンニャク栽培地の周囲にある個体、そして、X集落の在来カラシナ、家側のカラシナであった。

Aさんは、毎年出てくる場所の地カブは形質が保たれていると感じていることから、その個体は残すよう指示された。ニホンミツバチの巣箱を預かる場合を想定し、巣箱周辺の個体を残そうとした。また、風の影響などで種子がコンニャク栽培地に落ちやすいようコンニャク栽培地の周囲の個体を残すことを希望した。X集落の在来カラシナは勝手に生えてくる数が少ないために残すよう希望した。また、家側の個体を

表2 Aさんの栽培している葉菜類（筆者作成）

作物名	2020年10月					2021年4月				
	道沿い	上の畑	小屋の横	茶畑	背戸	道沿い	上の畑	小屋の横	茶畑	背戸
地カブ	○	○	○	○	○	○	○		○	○
在来カラシナ	○	○			○	○	○			○
在来カラシナ（譲渡）										○
コマツナ		○					○			
サントウハクサイ		○					○			
ハクサイ	○				○					
サニーレタス						○				
キャベツ		○			○	○	○			○
チンゲンサイ		○			○		○			
ハウレンソウ		○				○	○			○

残す理由は、その中に「名前のないカラシナ」がまざっており、Aさんが後で判断し抜き取り作業を行おうとしているためであった。抜き取る理由は食味が悪い上、丈夫で自生力が強いいため、種子をこぼさないための対策からであった。

Aさんの選別基準は、種類によるものと、生えている場所によるものがあった。筆者はAさんが地カブだけを選び出し、種子を残そうとしているのだろうと考えていた。しかしAさんは、「名前のないカラシナ」のような事例を除いて、地カブ以外のものでも、こぼれ種子が落ちる場所が適当ならば残すことを希望した。これは、地カブは勝手に生える個体数が近代品種に比べ圧倒的に多いこと、地カブ以外が生えてきても食利用できること、また、地カブが交雑しても、交雑していない個体をどこかで得られると考えていることによるものと推察された。

#### ②こぼれ種子の播種

Aさんは、選別した個体の種子が、風や鳥などによって自然に播種されるよう意識し、個体を畑に放置する。Aさんは、播種や発芽のタイミングを植物に委ねた方が生長が良いと考えており、「好きな時に好きな場所で勝手に育ったものの方が丈夫に育つ。」と言う。このような考え方や栽培方法は、農作業を共にしていた祖母からの影響があった。祖母はダイコンなどを常畑で自家採種し、株間の広がったかつての茶畑や、焼畑のサトイモ畑やダイズ畑などに大量にふりまいていたという。その結果、好きな場所で勝手に育ったものが多数見られ、食利用したという。

#### ③自家採種

Aさんは、獣害などの影響で地カブが無くなった場合を考え、毎年地カブの種子を採種している。X集落の小屋横のコンニャク栽培地の地カブは獣害に遭い、2021年は地カブが確認できなかったため、保存している種子を播種する予定だという。

#### ④地カブの除草

地カブや他の葉菜類は10月のコンニャク収穫

後に一斉に生えてくるため、Aさんは、幼苗の様子を見て多く生えているところは除草し、畑に鋤き込むという。多すぎると肥料も奪われ、残渣の処理も大掛かりになるためである。また、長期間にわたって放置すると、コンニャクの芽が出てくるのが遅くなってしまう場合があるからであった。

#### ⑤施肥

Aさんは、保温と施肥を兼ね、秋には落葉を上から敷き詰め、春先は鶏糞を施肥する。また、抜き取った地カブの植物残渣も施肥として利用する。地カブの残渣は、その場に倒しておき、10月のコンニャク収穫時にそのまま自然に土に鋤き込まれるようにしている。Aさんは、焼畑を行っていた頃から採草地や休憩中の焼畑で得た草を乾燥させて常畑に投入してきた。最近では草が入手できず、購入したカットワラや拾った落葉を入れている。地カブの植物残渣はその一部となっている。

以上から、Aさんは、背戸の常畑においては地カブや他の葉菜類も結実させ、それぞれのこぼれ種子がコンニャク栽培地に平均的に自然に大量に播かれるよう意図していることがわかった。畑の除草や耕起などをきっかけとして、播かれたうちのどれかの種子が勝手に生え、丈夫に生長することを期待しているのである。

### 5. まとめと考察

以上、静岡県井川地域のX集落における地カブ栽培について報告した。

自生するカブの仲間と焼畑の関係などについては、いくつかの事例報告はあったが断片的な記録にとどまり、その詳細は明らかにされてこなかった。今回の調査において、X集落における昭和30（1955）年頃の地カブ栽培や、Aさんの現在の栽培方法、山村の生業活動や生活文化とのかかわり、こぼれ種子を用いる理由、近代品種と比べた地カブの有用点を明らかにすることができた。



地カブの栽培の過程において昭和30（1955）年頃と現在の栽培を比べると、こぼれ種子を用いることと、コンニャク栽培を伴うことに共通性があった。

X集落の常畑で現在行われているように、こぼれた種子から勝手に生えた作物を利用することは、よく見聞きすることである。しかし、Aさんのこぼれ種子の用い方は、その量や種子の種類が著しく多いものであった。多種の葉菜類栽培という昭和30年代以降の栽培の変化がこぼれ種子の種類を増やしていた。

Aさんは、背戸の常畑において一般的な栽培方法を中心としていた。一方で、地カブ等については大量の種子を自然に任せて播種し、耕起などをきっかけに勝手に生えるという栽培環境を作っていた。背戸の常畑では生業としてのコンニャクの栽培と、勝手生えする地カブという極めて自給的な作物の栽培が共存している。茶畑から背戸の常畑へと耕作地は変化したがる、このような栽培方法が現在まで持続していることは興味深い。

また、今回はこぼれ種子を用いる栽培法が祖母の影響を受けた栽培法であることを論じたが、Aさんがこのような栽培を続ける背景には、耕作地内の予想しない場所での地カブ等の収穫が、山菜を発見したかのような楽しみを含んでいることと、勝手に生えてきた作物の形質などの観察に実験的な関心を持っていることもあるように思われた。

コンニャク栽培と地カブの関連については現在のAさんのコンニャク栽培地が、コンニャクのため不耕起であることや、保温のための落葉の施用が、地カブにとっても越冬しやすい環境となっていることが考えられた。

調査地のX集落では、チャやコンニャクは重要な商品作物であった。これらの栽培地である茶畑において、コンニャクの収穫が終わると勝手に生える地カブは、副次的に得られる、秋から春先の自給的食料として継承されてきた。し

かし、焼畑での栽培や、養蜂においては茶畑の菜花を春先の蜜源に利用するなど、地カブは山村の生業と生活文化に密接に関わってきた作物であった。また、地カブの自生力の強さや、耐寒性など植物としての有用な点が、近代品種に代替されず、井川の冷涼な気候下でも栽培を可能にしていた。

さらに、今回の調査を通じて、焼畑での野菜類栽培の知見を得ることができた。サントウハクサイが焼畑で栽培されていたことや、X集落においては焼いた1年目の土が固く、ヒエと地カブしか育たなかったという体験談は注目される。

今後は他の在来作物の継承についての調査も行い、なぜ在来作物の栽培と利用が持続しているかを、栽培方法、作物の特徴、利用方法などの比較から通時的に明らかにしていきたい。

## 謝辞

この調査および研究を行うにあたり、お世話になった静岡県井川地域のX集落の皆様、何日間も農作業に同行させていただいたA様、その他の井川地域の皆様、筑波大学井川演習林の皆様、井川支所の皆様に大変お世話になりました。また、中川原敏雄様には自生する野菜についてご教示いただきました。山ノ内崇志先生、木俣美樹男先生には資料等のご教示をいただきました。

調査にあたっては、総合研究大学院大学地域文化学専攻の学生派遣事業の助成を受けました。

池谷和信先生には、丁寧なご指導を何度も賜りました。院生の新海拓郎さんからは内容について多大なるサポートをしていただきました。

記して感謝いたします。

## 注

- 1) 地下部が太らない、また多少太っても利用せず主に地上部の葉茎を利用するカブの種類はカブナと呼ばれるという（江頭 2021a）
- 2) 江頭は、自生するカブの仲間の多くが必ずしも人が播いたり採種したりしたわけではないために、厳密には在来作物から外れてしまうという。



このため「人の生活圏で世代を超えて利用されてきたカブの仲間」については「広義の在来作物」として紹介したいと述べている（江頭 2021b）。  
3) 花芽をもった茎が急速に伸長すること。（松本・大垣・大川 1989）

## 引用文献

青葉 高

1981 『野菜—在来品種の系譜』法政大学出版局。

池谷和信

2019 「日本の山々は何に使われてきたか—「温帯山地」における多様な環境開発」山本紀夫編『熱帯高地の世界「高地文明」の発見に向けて』127-171、ナカニシヤ出版。

稲垣栄洋

2014 『しずおかの在来作物』静岡新聞社。

江頭宏昌

2021a 「日本列島における在来作物について—カブ・カブナと山形県の焼畑を中心に」池谷和信編『国立民族学博物館・五木村共催展示 佐々木高明の見た焼畑—五木村から世界へ—報告書』91-95、国立民族学博物館。

2021b 「在来作物と焼畑—現代に継承する意義」『季刊民族学』177: 74-79。

大村和男

1997 『祖父母から孫に伝えたい焼畑の暮らし—静岡市井川の老人たちが語る山の人生』静岡市立登呂博物館。

香坂 玲・富吉満之

2015 『伝統野菜の今—地域の取り組み、地理的表示の保護と遺伝資源』清水弘文堂書房。

齊藤政美・椎葉クニ子

1995 『おばあさんの植物図鑑』葦書房。

静岡市

2010 『改訂版南アルプス学・概論』静岡市環境局環境創造部環境総務課編。

静岡市葵区役所地域総務課

2013 『葵区在来作物ガイドマップ』。

寺嶋 悠

2021 「在来作物から見た五木村の食と生活文化」池谷和信編『国立民族学博物館・五木村共催展示 佐々木高明の見た焼畑—五木村から世界へ—報告書』84-90、国立民族学博物館。

縄田栄治・山本宋立

2009 「野菜のドメスティケーションを考える」『国立民族学博物館報告』84: 391-408。

広田 勲・田口裕允・宮川修一

2020 「中山間地域の自給的な農業生産・植物採取・消費の実態—岐阜県揖斐郡揖斐川町小津地区の事例—」『農林業問題研究』56(2): 46-53。

松島憲一・根本和洋・敦川亜紀子・加藤友希・大崎正太・西田弥生・南 峰夫

2013 「下伊那郡大鹿村において食用とされる野生植物について」『信州大学農学部紀要』49(1-2): 43-50。

松本正雄・大垣智昭・大川清編

1989 『園芸辞典』朝倉書店。

山形在来作物研究会

2007 『どこかの畑の片すみで—在来作物は山形の文化財』山形大学出版会。

2021年9月30日 受付

2021年12月2日 採択決定



写真1 常畑内の地カブの自生 (Gさん左、Fさん右) (2021年3月 筆者撮影)



写真2 道沿いの畑 (左) と道沿いの畑にあった地カブ (右) (2021年3月 筆者撮影)



写真3 上の畑 (左) と上の畑にあった地カブ (右) (2021年3月 筆者撮影)





写真4 茶畑の地カブ（左） 獣害をうけた同じ地カブ（右）  
（両方とも2020年10月 筆者撮影）



写真5 小屋の横のコンニャク栽培地（2020年10月左・2021年3月右 筆者撮影）



写真6 背戸の常畑のコンニャク（左）と同コンニャク栽培地の地カブ等のとう立ち（右）  
（2020年10月左・2021年3月右 筆者撮影）



写真7 背戸の常畑で栽培されていた地カブ  
(2021年3月 筆者撮影)



写真8 個体の選別  
(2021年4月 筆者撮影)